Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

「国際労働力移動の人類学」試論 : フィリピン・イロコス地方一農村の事例研究（特集 比較社会学への展望）

長坂, 格

(Citation)
社会学雑誌,12:115-139

(Issue Date)
1995-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011847

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011847

KOBE UNIVERSITY

「国際労働力移動の人類学」試論

――フィリピン・イロコス地方一農村の事例研究――

長坂格
神戸大学大学院文化学研究科博士課程

はじめに

本稿は、フィリピン共和国、ルソン島北西部のイロコス地方に居住するイロカノ[1]の一農村からの国際労働力移動、すなわち海外出稼ぎの展開過程について、具体的な資料[2]からその特徴を報告し、あわせてそれをイロカノ社会の社会・文化的側面から考察することを目的とする。

イロカノは、フィリピンにおける他の言語集団と比して多くの移住者を国内、国外に送り出してきていることで知られている。歴史的に見れば、イロカノの移住（migration）はスペインによるフィリピン統治のかなり早い段階から行われていたようであるが、その動きが本格的になるのは一九世紀の東のカガヤン地方、南の中部ルソン地方への国内移住からであった。その後アメリカ統治期に入り、フィリピン全域への国内移住と、ハワイ・アメリカ西海岸への海外移住が盛んに行われた。フィリピン共和国が独立してからしばらくは移住の焦点はもっぱら国内であったが、一九六〇～一九七〇年代にかけて、アメリカ政府の移民政策の転換を受けたアメリカへの移民（permanent emigration）と、その他の国々への海外出稼ぎ（overseas labor migration）が見られるようになった。そして現在では後者の海外出稼ぎが、イロコス地方あるいはフィリピン全体の中で、より重要な位置を占めるようになってきている［Cariño 1992］。海外出稼ぎは移民と較べ母社会との社会的紐帯が強く保持される傾向にあり、それゆえ母社会に持つ社会的経済的意味も大きいと考えられる。正規の契約を行った者だけで毎年約六〇万人以上の出稼ぎ労働者が国外に流出するフィリピンにおいて、海外出稼ぎはフィリピンの各地域社会研究にとってすでに不可欠な問題となってい

る。しかしながら、このような海外出稼ぎについての現地調査に基づいた研究は、フィリピン全体に視野を拡大してもまだほとんど行われていないのが現状である［cf.Bautista 1988; Pertierra 1992］。従って、イロカノ社会についての従来の民族誌的研究［e.g. Lewis 1971; Jocano 1980; Pertierra 1988］の成果を踏まえながら、近年の海外出稼ぎの展開にいかなる特徴がみいだされるか、海外出稼ぎが母社会にとってどのような意味をもち、そしていかなる社会変化が生じているのか、などといった点を、具体的な調査資料によって検討していく試みは、イロカノ社会及びフィリピン低地社会研究にとっての今後の課題であるといえる。そして、そのような作業を綿密に行っていくことは、同時に、歴史的に移住を繰り返してきたイロカノ社会を総合的に把握するための一つの糸口になると思われる。

以上のような点を踏まえ、より具体的には次のような手続きに従ってイロコス地方からの国際労働力移動の予備的考察を行いたい。まず次章では、国際労働力移動への本稿の視点を整理する。本稿では、従来主として経済的不均等あるいはマクロな政治経済構造の変動から検討されることが多かった国際労働力移動を、社会人類学的視点から対象社会による社会・文化的適応過程として捉えることによって考察をすすめたい。次に調査地の概況を移住状況を中心に簡単に述べておく。そして三章では、調査村におけるイタリア・ローマへの出稼ぎの展開に見いだされる援助関係のネットワークと母社会の世帯構成の変化に着目し、イロコス地方の人々が既存の社会関係を維持発展させつつ海外出稼ぎという新たな生計手段の機会に対応した過程を明らかにしてみたい。

一　国際労働力移動への視点

本章では、従来の国際労働力移動へのアプローチをごく簡単に検討したうえで、本稿がとる人類学の立場からの国際労働力移動への視点を提示し、次章以下の論述の基本的枠組みを明らかにしておきたい。

国境を越えて行われる自主的な地理的移動である国際労働力移動に対する最も単純で多く用いられてきた枠組みはプッシュ―プル理論である［成家　一九九一：五〇］。プッシュ―プル理論は、労働力移動を送り出し地域の貧困と後進性の結果として把握する。そこでは、低所得、高い失業率、劣悪な生活水準などの送り出し地域のプッシュ要因と、移住先地域のそれらの逆の特性のプル要因とがあいまって労働力移動が生じるとされる。確かに現代の世界的な人の流れは世界経済の周辺から中心へという方向が主流であり、大枠ではこの説明は説得力を持つ。しかしながら、こうしたプッシュ―プル理論による説明は、国際労働力移

動のより詳しい現状と照らし合わせると問題が生じてくる。というのも、この枠組みでは、経済的な指標においては同等に貧しい地域のうち、なぜ特定の地域だけがより多くの移住者を生みだし、なぜ他の地域では同様な現象がみられないのか、あるいはなぜ特定地域からの労働力移動が始まるとそれが継続化していくのか、といった点がほとんど明らかにされないからである[Portes & Böröcz 1989:607][3]。

このようなプッシュ—プル理論の持つ問題点としてまず挙げられるのは、この理論が静態的（均衡論的）であり、国際労働力移動の歴史的動態を考慮しえないことである[成家　一九九一：五一]。労働力移動はそれぞれの歴史的条件や政治的条件のもとで行われているのであり、経済的な指標を中心とした格差からだけでは把握することができないからである。こうした観点のもと、国家間の政治的経済的従属関係などに着目し、労働力移動をマクロな政治経済構造の文脈の中で歴史的に検討する研究が行われるようになっている[Wood 1982:302; cf. 石川　一九九三：五七]。しばしば歴史—構造アプローチと総称されるこのような研究では、従属理論や世界システム論の影響を受けながら、国際労働力移動が展開されていく過程をマクロな政治経済構造の動態の中に位置づける作業が行われてきた。一例を挙げれば、サッセンは、世界経済の中心地域から一部の周辺地域への海外投資の増加が、現在の国際労働力移動が広範に行われる条件を形成したことを包括的に論じている[Sassen 1988; cf. Portes & Bach 1985]。このような方法は、プッシュ—プル理論では論じられることがなかった、国際労働力移動が行われる様々な地域を取りまくマクロな歴史的、政治経済的条件を明らかにする場合に有効性を発揮する。だが、労働力移動が実際に行われる様々な地域社会をそのような条件を一様に受け入れる受動的なものとして描きがちであることもまた事実である[4]。そこでは、人類学者が関心をよせる国際労働力移動が行われる条件（マクロな政治経済構造の変動）への地域ごとの異なる反応を論じる余地はない[石川　前掲：五八]。

ここで注意しておきたいのは、ポルテスらがいうように国際労働力移動は「それ自体極めて社会的な現象であり」[Portes & Böröcz 1989:612]、送金やプレゼントなどの「モノのやりとりは、社会関係に埋め込まれている」[Glick Schiller *et al* 1992:10]ということである。つまり、国際労働力移動は多様な社会的背景のもとで行われているのであり、それゆえそれぞれの地域社会の社会・文化的側面から考察を加えるという人類学的アプローチが必要となってくるのである。このようなアプローチは、上述したプッシュ—プル理論や歴史—構造アプローチではさほど検討されることがなかった、国際労働力移動の展開過程が示す特徴の出身地域社会ごとの差異や、一様ではないそれらの通時

的変化を明らかにする可能性を持っている。もちろん、ここでもマクロな政治経済構造の変動は無視しえない。例えばグリック・シラーらは「移住者についての研究は、動態的で変わりやすい、しかし文化的にパターン化された社会関係の分析と、グローバルなコンテクストの分析とを結び付けることが肝要である」[*ibid.* :8]と述べている。しかし、小地域社会の民族誌的研究という特徴を持つ人類学の立場からは、そうしたマクロな政治経済構造の変動という条件を視野に収めながらも、それぞれの地域社会の人々が既存の社会の枠組みを再編しつつ、いかにそうした条件に対応し自らを適応させていくか、という問題により強調点が置かれるべきであると思われる[Ortner 1984:143; Blanc-Szanton 1990:348-9]。改めていえば、本稿の立場は、従来、経済的不均衡や、マクロな政治経済構造の変動の中で受動的に行われているように描かれてきた国際労働力移動を、対象社会からの社会・文化的適応過程として捉えようというものである[cf. Maegawa 1994:65]。以下では、本稿の冒頭で述べたとおり、イロコス地方の一農村における海外出稼ぎの展開に見られる社会関係の有り様に着目し、イロコス地方の農村社会からの適応過程を記述分析していきたい。

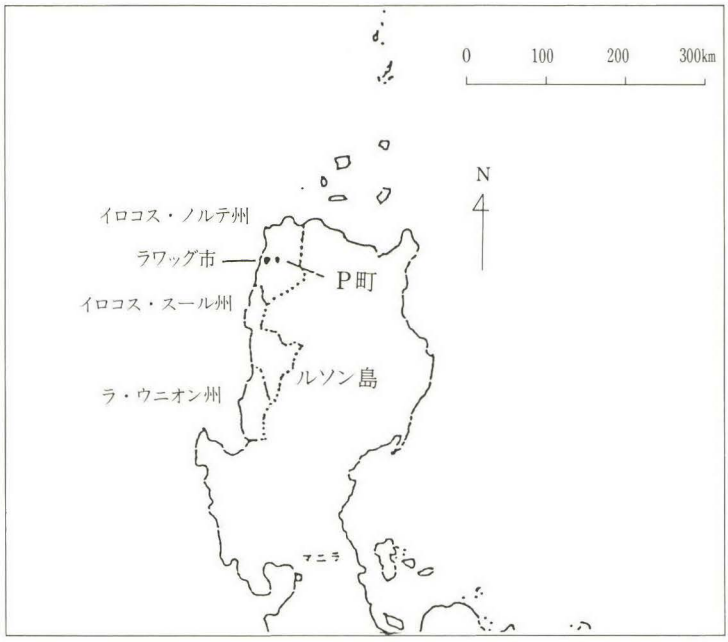
二　調査地の概況

ここでは記述分析の対象となるフィリピン・イロコス地方のイロカノの調査村の状況について、①調査地の概況、②移住、の二つの側面から記述していく。

二―一　調査地の概況：経済的生態的背景

イロコス地方はコルディリエラ山脈と南シナ海に挟まれる形で、フィリピン・ルソン島北西部に位置しており、人々の多くが居住する平野部は「狭小な土地」という言葉によって特徴づけられる。先にも触れたように、イロコス地方は多くの移住者の送り出し地域となってきたが、この「狭小な土地」にかかる人口圧力は、農業以外の産業が依然未発達であることとあいまって歴史的な移住への強い要因となってきたといえる。フィリピン共和国の第Ⅰ地域（region）のうちパンガシナン州を除くイロコス三州（イロコス・ノルテ、イロコス・スール、ラ・ウニオン）の人口は一九九〇年の時点で約一五三万一千人[5]で、住民のほとんどはイロカノである。現在では水稲耕作とその他の換金作物栽培（タバコ、にんにく等）を主たる生計手段とし、後述する移住者による仕送り等も世帯によっては大きな比重を占める。

調査を行ったイロコス・ノルテ州P町は、同州の州都ラ



ワッグ市から約一五キロ東の内陸部に位置する。人口は一九九二年の町役場の統計で一七、五九九人となっている。P町の中心部であるポブラシオン（*poblacion*—町役場・教会などがある町の中心地）では、他のフィリピンの町と同様に定期市が開かれている。市場は水曜と日曜の週二回開かれ、村に居住する人々は村では手に入らない必需品のほとんどをこの市場で購入することになり、移住とともに村と外部社会とを繋ぐ一つのチャンネルとなっている。

S村はP町を構成する二三のバランガイ（*barangay*—行政村）のうちの一つである。世帯数、人口はそれぞれ一二六世帯、六〇四人となっている。しかしこの数字は現在居住していない家族成員（移住者）を含んでおり、実際に居住している世帯、人口はこの数字よりはかなり少なくなっている。主な生計手段は雨期の水稲耕作と乾期のタバコ等の換金作物栽培の組み合わせであり、ほとんどの世帯が耕地を所有しているが平均所有面積は〇・八㌶程度である。そして半数以上の世帯で農業所得に加えて海外、国内からの定期的、あるいは不定期の仕送りが見られる。

村には六つの集落（*sitio*）がある。そのうちの二つの集落（三二世帯、一一八人）をサンプル世帯とする一方で、村一帯で海外出稼ぎに関するインタビューを行った。サンプル世帯の調査時点で居住している（出稼ぎの一時帰国を除く）一世帯当たりの平均成員数は三・六九人と少なめである。また男女共に二〇～四〇代の人口の割合は低くなっており、二〇才未満と五〇才以上人口が七割以上を占め、子供と老人中心の人口構成となっている。以上の数字は後

述の海外出稼ぎの進展に強く影響されていると考えることができる。

二―二　移住

S村の移住については、イロコス地方全体の移住の歴史と同様の傾向が観察される。すなわち、今世紀初頭よりハワイへの移住が、カガヤン地方、ミンダナオ島への移住と平行して広範に行われ、フィリピン共和国独立以降はマニラ等の国内移住が中心であり、一九七〇年代からは国内移住と並んでアメリカ合衆国への移民、その他の海外への出稼ぎが広がった、という傾向である。こうした歴史的傾向はイロコス地方の農村部で調査を行った他の報告［e.g. Griffith 1978; Young 1980］にも表れている。

S村の現在の移住状況は、移住先別にみると次の三つに大別されることができる。まず、最初はマニラ、ミンダナオ島のダバオ等への国内移住であり、これは様々な移住先に就業と就学のために独身者が単身で移住するケースがほとんどで、一九六〇～七〇年代に最も多く見られたものであるが、現在その割合は以前と較べると少なくなりつつある。

二番目は一九六五年のアメリカ合衆国の移民法改正以降のアメリカへの移民である。一九六五年移民法の要点を簡単にいえば、①アメリカ市民または永住者の近親者がいる者と、②医師・看護婦・技師等の特殊技能を持つ者に限り、アメリカへの合法的移民が可能となったことである［Liu *et al* 1991:492-3］。このうちS村からのアメリカへの移民は①のケースに限定されており、主に一九二〇～三〇年代にハワイ、アメリカ西海岸へ移住し、現在もアメリカに居住している（あるいは居住権を持っている）近親者を持つ人々によって行われる。そのほとんどは、ある個人→配偶者→その子供達、というように移民資格を有する関係で結ばれた家族単位で移住が行われる。一時帰国も次に述べる海外出稼ぎよりも少なく、どちらかといえば母村落社会とのつながりは希薄になっていく傾向がある［Griffith 1978:115］。

三番目は、一九七〇年代後半に始まったイタリア・ローマへの出稼ぎである。現在、S村からのアメリカ以外の海外移住先としては、二つの集落を例にとるとサウジアラビア、日本があるが各一名ずつに過ぎず、ローマへの出稼ぎ四〇人と比較すると例外的であるといえる。S村におけるローマへの出稼ぎは一九七八年に一人の女性が友人を頼って行ったことから始まり、その後急速に増え続けて現在に至っている。ローマでの職種は、男女問わずほとんどすべてがお手伝い、庭師等、いわゆる家内労働者である。ローマへの出稼ぎ労働者の特徴としては、①（若年独身男性中心であった一九二〇～三〇年代にかけてのハワイへの出稼

ぎに較べて）性別に偏りがない、②年齢層としては二〇～三〇代が中心である（平均年齢三四才）、③七割近くが既婚者によって占められており夫婦で出稼ぎに出るケースが多い、④何らかの高等教育を受けた者が半数を占め、比較的経済状況が良好であった世帯に出稼ぎ労働者が多い、といった点が指摘される。

以上三つに大別される移住パターンのうち、調査時点（一九九三年）では三番目のローマへの出稼ぎが最も多く行われている。また、ローマへの出稼ぎでは、夫婦が子供達を母村に残して出稼ぎに出るケースが多く、それゆえ他の二つの移住形態、すなわち若年独身者中心のマニラ等への国内移住、家族単位で行われるアメリカへの移民と比して、母村落社会とのつながりが強く保持され、母村落社会への影響もより大きなものとなることが予想される。フィリピン全体から見れば、イタリアを含むヨーロッパへの移住はそれほど多くないと言える[6]が［菊池 1991:674-675］、最近行われたイロコス地方の六つの村の調査［Perterra 1992］によれば、イタリア、イギリスなどのヨーロッパ諸国への出稼ぎも少なからず見られ、全国的にも近年増える傾向にある。むしろ、各村毎に主要な移住先を持つというのが特徴のようであるので、移住先別に考えるよりもまず各村毎の実態を詳細に検討する作業が行われる必要がある。ついては、母村とのつながりが強く保持され、母村落社会への影響も大きいと考えられるS村からのローマへの出稼ぎに限定してその展開過程を詳述していく。

三　S村からのローマへの出稼ぎの展開過程

三―一　S村からのローマへの出稼ぎの始まり

前章でも多少触れたとおり、S村におけるローマへの出稼ぎは一九七〇年代の後半に一人の女性から始められた。最初にローマへ出稼ぎに出たのは、S村の村長の娘であり、イロコス・ノルテ州の州都であるラワッグ市の短大の秘書科を卒業したアナであった。彼女は短大卒業後、親族を頼ってマニラに出て印刷工場で働いていた。数年間マニラで働いた後、仕事を休んでイロコスに戻っているとき、当時すでにローマへ出稼ぎに出ており一時休暇のためイロコスを訪れていたラワッグの短大時代の友人に会った。彼女はその友人から、ローマでの仕事のことや賃金について話を聞いているうちに自分も試してみたいと思うようになった。そこでアナは、祖父（父の父）の弟であり、一九一九年にカリフォルニアに渡って果樹園で一五年程働いていたことのあるフリアンから父親の土地を担保に借金してローマへ行った。当時、イタリア政府は外国人労働者に対してさほど厳しい政策をとっておらず、入国は比較的容易であったという。ローマでは先の友人の家に取りあえず世話になり、

仕事も探してもらった。

このように、S村からのローマへの出稼ぎの始まりは、一人の女性の友によって紹介されたというように非常に偶然性の強いものであった。アナがラワッグ時代の友人からローマについての話を聞きローマ行きを決心したときに、彼女に多額の現金（二万六千ペソ：一九七八年）を都合できる富裕なアメリカ帰りの祖父の弟がいたことは好運であったし、当時イタリア政府が外国人労働者に対して放任主義をとっていた(7)ことも幸いした。また、イロコス地方が海外移住の古い歴史を持つことや、彼女がすでにイロコス地方を離れマニラで働いていたという個人的経験は、彼女にとってローマへの出稼ぎが極めて現実的な選択肢となることを可能にしたであろう。しかし、S村の人々はこうして外部から偶然にもたらされた海外出稼ぎという新たな生計手段の機会に自らの社会関係を再編しつつ主体的に対応していったのである。そこで以下では、S村と隣村のT村出身の六二人（うちT村出身者一九人）のローマへの海外出稼ぎ労働者及びその家族のデータをもとに、そうした対応の過程を考察しよう。

三―二　海外出稼ぎの展開過程：援助関係

ここでは、S村における海外出稼ぎの展開過程、より具体的にはS村から新たな出稼ぎ労働者達が誕生していく過程に注目し、そこに見られる社会関係の再編の様態を記述分析する。ついては、S村から新たに出稼ぎ労働者が誕生していく過程において、どのような状況で社会関係が組織されるかをまずみておきたい。

S村の人々は当てもなくローマへ行くのではなく、故郷での人間関係を活用してローマでの仕事・生活に順応していく。そこで、S村の住人が新たにローマへ出稼ぎに出る場合、まず問題となるのは出稼ぎ資金である。ここで出稼ぎ資金と呼ぶものには、渡航費とパスポート等の書類を揃えるための経費、旅行者を装うための「見せ金」を含む旅行中の小遣い、ほとんどの手続きを代行する代理店(8)に支払う手数料などが含まれる。出稼ぎ資金をねん出する方法としては以下のものがある。

①自己資金（貯金や家畜・土地の売却）
②銀行からの借金（隣町のS町の銀行より土地を担保に借金する）
③耕地を担保にS村および隣村の住人から借金する（*salda*）
④ローマへの出稼ぎ労働者からの借金

自己資金で出稼ぎにかかるすべての費用を賄うことは、近年の出稼ぎに必要な額の高騰によってほぼ不可能となっている。そのため現在では、自己資金をある程度用意した場合でもそれは補完的なものにとどまっていることが多い。

また、一般にイロコス地方の農村では、銀行で借金することを可能な限り回避する傾向が見られる上に、銀行から借金できるほど充分な不動産を保有する世帯も少ないことから、銀行に依存した資金の捻出方法はさほど頻繁には用いられない。③の耕地を担保に借金する *sulda* と呼ばれる資金捻出方法は、この地方の村落内金融制度であり、ハワイへの出稼ぎの資金作りや、教育費などの捻出のためにかなり日常的に利用されてきた。

一般的にはこれらの四つの資金捻出方法のいずれかを、併用しつつ出稼ぎ資金を作っていくことになるが、S村において高額な資金を貸し出せる余力を持つのは、先に挙げたアナの例に出てくるような一九二〇年～三〇年代のハワイへの出稼ぎからの還流者と、ローマへの現役の出稼ぎ労働者に限られる。現在では出稼ぎ資金の捻出は担保を必要としない後者のローマへの現役出稼ぎ労働者に依存するケースがもっとも多くみられる。かくして、多くの出稼ぎ労働者と母村落社会の出稼ぎ希望者との間に資金援助関係がつくられていくのである。

次に、こうして資金援助を受けたS村出身者がローマにたどり着いた時にまず直面する問題は、仕事を見つけるまでの住居をどうするかである。そこで、彼らは同郷の親族などに住居を提供してもらいローマでの仕事・生活の手ほどきを受ける。家内労働者という職業柄、住み込みという形式が一般的であるため、雇用主は新たな出稼ぎ希望者の同居を許可しない場合が多い。したがって、住居の提供者は夫婦で出稼ぎをするなどしてアパート住まいをしている世話役的な役割を果たす者に集中する傾向がある。このような先行する出稼ぎ労働者による後続の出稼ぎ希望者への住居の提供は、新たにローマへ到着した者が当地での生活・仕事に順応していくためのメカニズムとして機能している。

以上のように住宅を提供された出稼ぎ希望者の次なる段階は仕事を探すことである。しかし、ローマに着いたばかりの者にとって仕事を探すことは極めて困難である。そこで、彼らはローマですでに働いている者に仕事を探してくれるように依頼することになる。多くの場合、親族や友人が雇用者に、「誰かフィリピン人のお手伝いさんを探している人はいないですか？」と尋ねてもらうことから職探しは始まる。長くローマで働いている者なら以前の雇用者や知り合いに依頼することができるので、このような仕事紹介関係も特定の個人に集中しがちである。

ここでは調査を行った母村落と移住先との間において組織化される以上の三つの援助関係の有り様に着目し、以下で考察していきたい(9)。

S村からの出稼ぎ労働者間に見られるこれら三つの状況に見られる援助関係は、表一からもわかるとおり、親族

関係・姻族関係を基礎においている。イロカノ社会は他の東南アジアの多くの諸社会と同様に双系制の親族組織を持っていることもあり、援助関係は自己を中心に双方的に広がっている。表－1を三つの状況別にみると、資金援助では、住居の提供や仕事紹介よりも近い親族関係の範囲内に収まる傾向があることがわかる。資金援助関係のほとんどは、夫婦間と、自己からみて四人の祖父母を共有する範囲（第一イトコ、自己のキンドレッドを表す最小の範囲でありこの範囲内での婚姻は強く忌避される）にある人々をさす *kaputot* の関係にある人々との間で作られている。この *kaputot* の関係にある人のうち誰に援助・保護などを実際に依頼するかは別にしても、この関係にある人への援助の要求は正当なものとされており、要求を受けた側は可能な限りそれに応じることが期待される[10] [cf. Pertierra 1988 :79]。高額な出稼ぎ資金を貸し与えることはローマで働く出稼ぎ労働者にとっても決して簡単なことではないが、一九八〇年代に次々と出稼ぎ労働者が新たに誕生していった背景には、こうした親族規範が大きな意味を持っていたと考えられる。

表－1　S村からの出稼ぎ労働者の援助関係

	資金援助		住居の提供		仕事紹介	
被援助者からみた関係		%		%		%
B/Si（*kabsat*）	23	35.4	18	29.0	22	35.5
F/M（*ama/ina*）	11	16.9	6	9.7	6	9.6
PF/PM（*lolo/lola*）	2	3.1	0	0	0	0
PB/PSi（*uliteg/ikit*）	4	6.2	4	6.5	3	4.8
1st Cousin（*kasinsin*）	3	4.6	2	3.2	2	3.2
その他の親族関係	1	1.5	13	20.9	8	12.8
Sp（*asawa*）	8	12.3	7	11.3	7	11.3
SpB/SpSi BSp/SiSp （男:*kayon*;女:*ipag*）	3	4.6	7	11.3	5	8.1
その他の姻族関係	4	6.2	2	3.2	5	8.1
友人	1	1.5	3	4.8	2	3.2
代理店	——	——	——	——	1	1.6
銀行	3	4.6	——	——	——	——
本人	2	3.1	——	——	1	1.6
小計	65	100.0	62	100.0	62	100.0
回答なし	6	——	2	——	2	——
総計	71	——	64	——	64	——

F＝father M＝mother Sp＝spouse B＝brother Si＝sister P＝parent

これに対して、住居の提供や仕事紹介という状況では、より広い親族関係・姻族関係を通じて社会関係が作られるという統計的傾向がある。これは、上述したように、これら二つの状況においては、多くの場合援助を要求する相手が特定の条件（アパート住まいかどうか、滞在年数など）を持った人に限られるということに関連している。つまり、援助を要求する側から見れば、特定の範囲にとどまらない親族関係・姻族関係などを利用して取りあえずの住居を確

保し、仕事を得ているといえる。さらに、姻族関係に関して言えば、イロカノ社会では婚姻は互いの親族を連合させるものであり、配偶者は婚姻と同時にそれぞれのキョウダイ関係に組み込まれることになる。例えば配偶者のキョウダイには、場合によっては自己のキョウダイと同じように援助を要求することもできる［cf. Pertierra 1988:81］。こうした強固な婚姻紐帯は姻族間の広範な援助関係と出稼ぎの急速な広がりを助長してきているといえよう。

次に、実際に出稼ぎが行われていく具体的な過程を見てみよう。

〈事例一〉ここでは、先ほどS村からの最初の出稼ぎ労働者として挙げたアナから辿れる援助関係の一部を具体的な事例として挙げる。すでに述べたように、状況によって援助関係の組織化のされかたが異なっているので、各状況別に記述していく。関係する出稼ぎ労働者の親族関係は図に記しておいた。

①資金援助

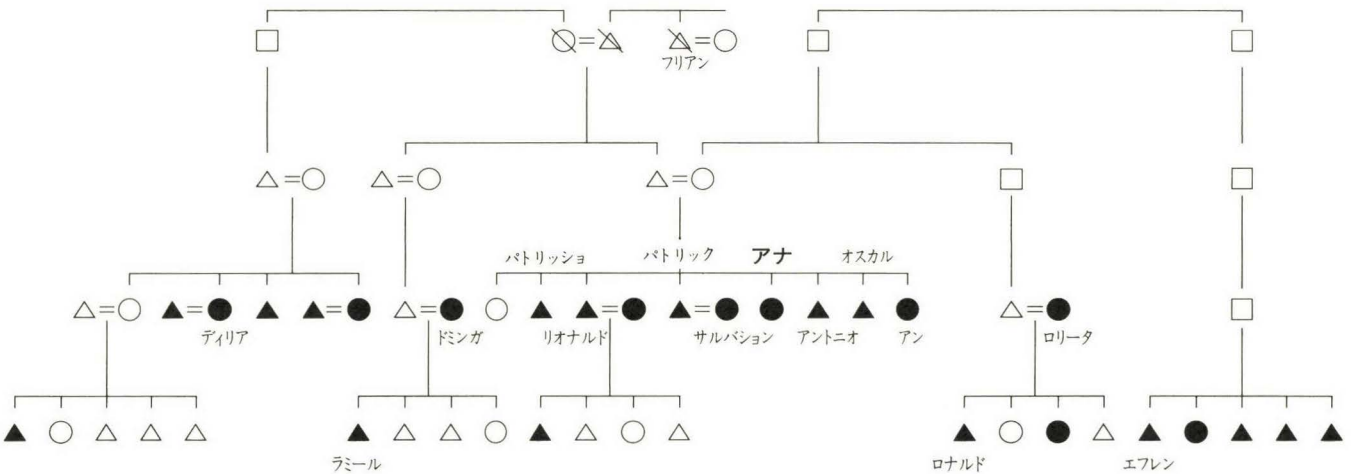
アナは父親のオジからの借金を一年程度で返済した後、一九八〇年に兄のパトリックに六万ペソ[11]を援助して彼をローマに呼び寄せた。そのパトリックは借金を返済し終わると二人の弟アントニオとオスカルに、一九八二年と一九八三年にそれぞれ六万ペソを貸してローマに呼び寄せた。その五年後の一九八八年には、兄のパトリッショにはパトリックが、妹のアンにはアナが資金九万ペソをそれぞれ貸してローマ行きを援助した。ここでは資金援助はキョウダイ間で行われており、キョウダイ八人のうち六十年代にダバオに移民した長女を除き、配偶者に資金援助されたリオナルドを含めて七人がローマへの出稼ぎ労働者となった。

このような出稼ぎ労働者間の資金援助関係は、必ずしもキョウダイ間あるいは夫婦間で行われるわけではないが、先ほど述べたように狭い親族関係の範囲にある者同士に限定される傾向がある。非常に単純化してしまえば、キョウダイ（及び近親者）間からその配偶者へ、そしてその配偶者のキョウダイへと援助関係が広がっていくことで出稼ぎが展開されていき、近年では親から子へという異世代間の資金援助関係によってローマへの出稼ぎが定着する傾向がみられる。

②住居の提供

アナが住居を提供した人々は系譜的にも地理的にも広い範囲に及んでいる。まず、兄のパトリックに住居を提供したのを最初に、弟のオスカル、アナから見て第二イトコの子供に当たるT村K集落出身のエフレン、エフレンと一緒に来た彼の第1イトコで同じくT村K集落出身のオウガスト、さらに翌年にはオウガストの姉のリディア

〈事例―〉 アナに援助を受けた出稼ぎ労働者の親族関係



▲● ローマへの出稼ぎ労働者

に同様に住居を提供した。その後もアナの第二イトコであるディリア、親族関係はないが後に兄のパトリックと結婚することになるサルバションと、サルバションの第一イトコであるベナンシャ、さらにはT村出身（オウガストとは家が隣同士）でアナの第一イトコの子供となるロナルド、妹のアンまで、一九八〇年からの約十年間に確認できただけで十人の出稼ぎ労働者に住居を提供してきた。これは、アナ本人の母村における世話役的な位置[12]と、彼女がかなり早い段階から雇用主と一緒ではなくアパート住まいをしていたことによると思われる。

③仕事の紹介

アナによる仕事の紹介もかなり活発である。羅列すれば、兄のパトリック、弟のアントニオ、先ほども出てきた第二イトコの子供に当たるT村のエフレン、彼の第一イトコのオウガスト、さらにアナの第二イトコのディリア、兄のリオナルド、父方の第一イトコの妻であるドミンガ、母方の第一イトコの妻であるロリータ、そして第一イトコの子供（ドミンガの子供）のラミールまで約十年間に九人の出稼ぎ希望者のために仕事を探した。初期に出稼ぎに出た（あるいは出るだけの資金源があった）人々のうち、母村において世話役的な地位にあるとされる何人かは、この事例のように活発に親族・姻族の出稼ぎ希望者に職を探している。先の住居の提供と併せて、これら二つの状況では何人かの世話役的な人物を中心にして援助関係が組織されているのである。

以上をまとめれば、S村の人々は、出稼ぎ資金の捻出という状況では特定の範囲の強固な親族関係と夫婦関係を基礎にして、また他の状況ではそうした範囲にとどまらない様々な関係を利用して海外出稼ぎを展開させてきた。ここには、*kaputot* のような特定の範囲の親族関係にある者同士の強固な紐帯及び、互いの親族に夫婦のそれぞれを組み込む婚姻紐帯とを基礎としながら、自己を中心としたさらに大きな広がりの中で他者との関係を適宜選択していく「状況論理（situational logic）の強調」［Lewis 1971:180; cf. 玉置 一九八二：九〇］というイロカノ社会の社会関係の特徴が見いだされよう。つまり、S村からのローマへの出稼ぎの展開は、S村の人々が、こうした社会関係の特徴において海外出稼ぎという生計手段の機会に新たに対応していった過程なのである。

また、こうして作られる援助関係のネットワークは、特に住居の提供と仕事の紹介という状況では、初期に出稼ぎに出た人々の中でもとりわけアナのような母村落社会において世話役的な地位にあるとされる人々を中心に広がる傾向にある。このことは、移住先社会と母村落社会とをつなぐ形で作られる社会関係が母村落社会での既存のパトロン

―クライアント関係などを基盤に作られていることを示唆しており、それゆえ両者を切り離して別個の社会関係として考察する方法ではこの出稼ぎの展開過程を理解することができないことを示している[13]。

三―三　海外出稼ぎと世帯

二章で述べたように、独身若年男性がその大半であった一九二〇～三〇年代のハワイ・アメリカ西海岸への出稼ぎと異なり、近年の海外出稼ぎは既婚者をその主体としているという特徴を持っている。S村及び隣村からのローマへの出稼ぎの場合、調査中に確認できた出稼ぎ労働者六二人中四二人が既婚者であったが、そのうち出稼ぎに出た後結婚した者も含めて三四人が夫婦で出稼ぎに出ている。このような夫婦単位での出稼ぎの実践はS村における「日常の共同生活を営む最小単位」[村武　一九七三：IX]としての世帯の構成の変化を予測させる。以下ではそうした世帯構成の動態を、イロカノ社会のみならず多くのフィリピン諸社会で一般的に見られる里子（fosterage）との関わりで考察しよう。

里子は「実親以外の人によるいくらかの親の権利と義務の行使を含む、しかし実親による権利の放棄を意味しない、実親以外の人と子供の共住のすべての形式」[Schildkrout 1973:51]とされ、里親が社会的あるいは法的な〈親〉とならないという点で養子とは区別される[Nelson 1987:182][14]。こうした概念区分に対して、合田は土地所有や祖先祭祀の様態によって養取の社会的機能が異なってくるため、養子―里子に通文化的な概念区分を設定することにはあまり生産性が期待できないとした上で、「民俗範疇に養子と里子の区分に対応する概念が存在すれば、分析概念として養子と里子の区分はその重要性を失わない」[合田　一九八九：一四七]と述べている。イロカノの場合、里子を *tarakenen*、また里子取りを *tarakenen* と呼んで、法的あるいは慣習的な養子 *ampon*、養取 *amponen* と区別しており、里子の場合は財産相続の権利はない。そこで、本節ではこうしたイロカノの民俗概念である *taraken* を里子と呼んで考察を進めることにする[15]。

次に、イロカノ社会における世帯構成に関わる居住規制、相続などを概観しておこう。イロカノ社会においては、他のフィリピン低地キリスト教徒諸社会と同様に、夫婦は結婚後できるだけ早く独立した世帯を持つことが理想とされ、その際どこに住むかは様々な個別的諸条件による[Nydegger & Nydegger 1966:39; cf. 玉置　一九八二：二六七]。イロコス・スール州の山地の報告では、子供のうち親から最も多く相続した一人（しばしば末子）が結婚後も両親と住居を共にする直系世帯が多くみられるというが、常にそのような形をとるとは限らずやはり個別条件に

大きく左右される［Pertierra 1988:85］。いずれにしても、結婚後可能な限り独立世帯を持つことが望ましいとされることはイロカノ社会に共通しているといえる。また、イロカノの相続方式には、大きく分けて、結婚時の男子への持参財（male dowry）*sab-ong*[16]と親の死後の相続*tawid*の二つがある。前者は新婚夫婦が独立して生計をたてるための財としての意味を持っており、主に耕地などからなる。夫婦が法的に別居した場合にはこの耕地は夫側に返還されることになる。また、夫が先に死亡した場合は、子供がいれば妻はその耕地を夫側の親族に返還しなくてもよいが、子供がいなければ返還しなくてはならない［ibid. :103; Griffith 1978:27］。後者の*tawid*は、女子を含めたキョウダイ間の均分相続が理想とされ、個人の財となる［Jocano 1980:173］。しかし耕地の場合などでは均分に相続することは極めて難しく、キョウダイ間での調整[17]を行うことが多くなる。

かくして、一組の夫婦と未婚の子供達を中心とした世帯構成が現象することになるのであるが、それは必ずしも核世帯の形態をとるとは限らない。一例を挙げれば、ヤングの調査したイロコス・スール州の調査村では一五八世帯のうち八一世帯で、一組の夫婦とその未婚の子供または養子（核世帯）以外の親族または非親族が世帯構成員に含まれている［Young 1980:151］。これら八一世帯のうちには一時的に生ずる直系世帯も含まれるのであるが、ここで注目したいのは、調査時点で二才～二五才までの村民四七五人のうち五二人が実親以外に養育されているという里子の指摘である［ibid. :153］。このイロカノの里子取り*tarake-nen*は、移住や教育、経済的困窮などを契機に日常的に行われてきた。そしてこのような近親者の子供を養育することはイロカノ社会のみならずフィリピン諸社会に広く見いだされるものである［Young 1980:152; Pertierra 1988:86］。

S村においては海外出稼ぎの急速な広がりとともに、夫婦のどちらか一方が出稼ぎに出て片方の親と子供からなる世帯、夫婦で出稼ぎに出た場合その子供を近親者が里親となって養育している世帯が多くみられるようになってきており、核世帯はサンプル世帯（三二世帯）のうち三割程度にとどまっている。次に、そうした片方の親と子供からなる世帯、里子を持つ世帯のいくつかの事例を検討してみよう[18]。

〈事例二〉父親は一九七八年まで十年ほどマニラの木材工場で働いていたが、S村出身の母親と結婚したときに僅かな土地を*sab-ong*として分与されイロコスに帰ってきた。母親が一九九一年より彼女の第二イトコの援助でローマに出稼ぎに出たことで、父親と子供からなる世帯構成となった。母親は出稼ぎ歴が浅く、まだ出稼ぎに出る

ための借金の返済も終わっていないので、仕送りも不定期となっている。現在は父親と長女と次女が協力して家庭内の仕事をこなし、父親がタバコ栽培と稲作を行っている。

S村では夫婦での出稼ぎが主流であり出稼ぎ労働者の性別に偏りはないが、他の村ではこうした父親と子供からなる世帯も少なくない［Pingol 1994:115］。これは女性の方が多くの出稼ぎ先で仕事が得やすい状況にあるからである。夫婦のうち片方が出稼ぎに出た場合でも、すべての子供あるいは子供の一部を近親者等に里子に出すケースは多い。そして、夫婦で出稼ぎに出た場合、以下の事例のように子供達が近親者に里子にだされることになる。

〈事例三〉この事例は実親の両親、あるいは近親者の家に年少者等が吸収される一般的形態である。子供は三女以外皆結婚している。長男だけがS村在住で次男はマニラで比軍に勤務する。三男はS村の別の集落出身のアメリカ市民となった女性と結婚して、一九八七年にアメリカに移民した。長女夫婦と次女夫婦は共にローマに出稼ぎに出ている。三女も一九八六年に出稼ぎに出たが、体調を崩し三ヶ月で帰国した。ローマに出稼ぎに出ている二組の夫婦の子供三人が両親の世帯に里子に取られ、独身の三女を合わせた六人が居住している。

〈事例四〉六六才のダバオ出身の母親は、一九四六年に当時ダバオに働きに来ていたイロコス地方出身の夫と結婚した。一九五九年に夫の希望で共にイロコスに戻ってからは近隣のA村に居住していたが、次女に続いてS村出身の彼女の夫が一九八七年にローマへの出稼ぎに出た後に、娘夫婦から子供の世話と家の管理をしてくれと頼まれ隣村からS村のこの家に移ってきた。現在は娘の夫が一九九〇年に建てた家に、孫のうち、ローマに出稼ぎに出た二〇才の男性と、父方の祖父の家に居住して農業を手伝っている一八才の男性を除いた二人と三人で居住。この事例では、出稼ぎ労働者が新しく建てた家に親を呼び寄せ子供を養育してもらっている。

〈事例五〉八〇才を越える二人の姉妹は一〇人キョウダイであったが、六人は幼い頃に死亡している。若い頃にはハワイへの出稼ぎで男性が少なかったこともあり二人とも独身である。ともに一九五〇年代から家内労働者としてマニラで働いていた。姉は三年で帰ってきたが、妹は三二年間働いていた。彼女達のオイに当たる四七才の男性がその妻に続いて一九八七年にローマに出稼ぎに出たために、彼が二人の姉妹をそれぞれ、隣の集落、マニラ

凡例

：世帯構成員

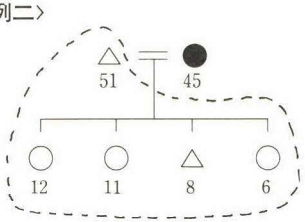
▲ ● ：ローマへの出稼ぎ労働者

⇨ ：転出・移住

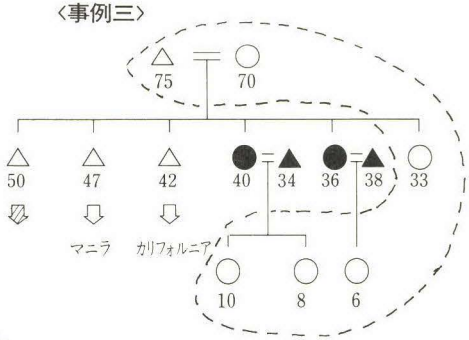
⇦ ：S村あるいは隣村に居住

△ ○ ：現在の世帯に転入（呼びよせられた）

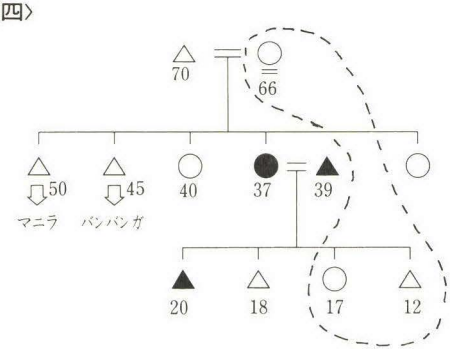
〈事例二〉



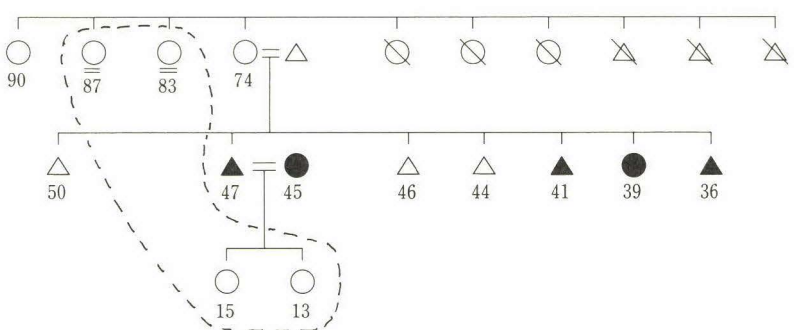
〈事例三〉



〈事例四〉



〈事例五〉



から家に呼び寄せて子供達と一緒に住んでもらうことにした。現在、姉妹二人とその孫の世代の二人、そして出稼ぎに出た父親が雇っている家内労働者（お手伝い）の五人が居住。この事例では、出稼ぎ労働者が新たに建てた家に近親者を呼び寄せ子供を養育してもらっている。

以上の三事例のように、夫婦で出稼ぎに出た場合、通常子供を近親者に里子に出すことになる。子供を預けられた近親者は仕送りを受けながら子供達を養育し、時には出稼ぎ労働者達が購入した農地を管理する。また、両親の親の世代が里親となっている場合でも、子供達は里親を通常二世代上の人々の呼称である *lolo, lola* ではなく、それぞれ父親、母親の呼称である *tatang, nanang* と呼ぶことが多い。子供たちを里子に出す理由としては、①フィリピンで子供が育って欲しい、②ローマでの雇用主が子供連れを望まない、③ローマでは教育費が高い、の三点が挙げられた。

かかる里子の事例は「核家族を中心として一定の近親というものが家族的な機能を持って存在し、その範囲が条件的に設定され、可変性にとみ、その周縁が必ずしも明確に設定できない」［中根　一九八七：二八八］というイロカノ社会を含めたフィリピン低地キリスト教徒社会の家族構成の特徴のうちに行われていると考えられる。そして、このような里親による養育がすでに慣習として普及しているることが、夫婦での出稼ぎを可能にしているともいえるし、子供への仕送りや頻繁な里帰りを通して出稼ぎ先と母村との強固な紐帯がその物理的距離にも拘らず保持され続けているともいえる。近年の傾向としては、近親者が自分の世帯で依頼された子供を養育するという従来多く見られた里子の形式に加え、事例四と事例五のように出稼ぎ労働者達が新しく建てた家に近親者を呼び寄せ、つまり不在となった夫婦の世帯に近親者を吸収して子供達の養育を依頼するという従来あまりみられなかった形式が生じつつあることが挙げられる。収集した事例は少なく、現時点でこうした里子の事例を一般化することはできないが、ここでは、先に述べたような家族構成の特徴の中で日常的に行われてきた里子が微妙に形を変えながら海外出稼ぎをバックアップしている現状が垣間見られた。つまり、S村の人々はイロカノ社会で日常的に行われてきた里子を、既婚者の海外出稼ぎの広がりという新たな状況の中で微妙な改変を行いながら用いることで、出稼ぎ先と母村落社会との紐帯を強固なものに保ち、海外出稼ぎを展開させてきたのである。

おわりに

本稿では、フィリピン・イロコス地方の一農村からの国際労働力移動の展開過程にみられる社会関係の特徴を、対

象社会の社会・文化的側面から記述分析することを試みた。限定された期間内の調査であり、また集めた資料も不十分なものであったので、本稿は今後筆者が取りくんでいきたいと考えている「国際労働力移動の人類学」の予備的考察の域を出ないが、以上で明らかとなった点をまとめておきたい。

調査対象となったS村では、一九七〇年代後半以降イタリア・ローマへの出稼ぎの広範な展開が見られた。この出稼ぎの展開は、単に経済格差やマクロな政治経済構造の変動といった条件に対して受動的に行われたものではなく、S村の人々が既存の社会関係を維持発展させつつそうした条件に新たに対応した結果であった。例えば、一人の女性によって始められた出稼ぎが以後急速に広がっていった背景には、特定の範囲の強固な親族紐帯を基礎にしつつ、自己を中心に広がる関係性の中で他者との関係を選択していくというイロカノ社会の社会関係の特徴の中で作られていく援助関係のネットワークの存在がみられたし、そうしたネットワークは母村落社会での世話役的な位置にあった人物を中心に広がっており、母村落社会の既存の社会関係を基盤として作られていた。また、近親者が実子以外の子供を養育するというイロカノ社会に一般的な里子取りは、近年の出稼ぎの広範な展開という情況においても盛んに行われており、既婚者の出稼ぎをバックアップし、母村落社会と出稼ぎ先との紐帯を強固なものとしていた。こうした出稼ぎの展開過程は、今日世界経済の変動の中で増大している国際労働力移動という新たな生計手段の機会に対する、既存の社会構造を背景とした地域社会からの社会・文化的適応過程として捉えられるものであり、従来の送り出し地域と受け入れ地域との経済的な格差、あるいはマクロな政治経済構造を重視した国際労働力移動研究ではほとんど論じられることがなかった部分である。世界経済における周辺部から中心部へという人の流れは今後とも益々拡大していく傾向にある。しかしこうした人の流れは必ずしも画一的に行われているのではなく、本稿で部分的に示したように、多様な社会的背景のうちに行われているのである。ここに、国際労働力移動というグローバルな現象を総合的に捉えるためには、そうした現象を対象社会による社会・文化的適応過程として詳細に検討し、さらにそうした過程の比較を行うといった社会人類学的アプローチが必要となる理由がある。

最後に、以上で明らかにされた点を踏まえていくつかの今後の問題点を挙げておきたい。

まず、本稿ではローマへの出稼ぎを行ってきた一つの村落を中心にその展開過程を報告したが、こうした過程は移住先の違いによって様々な変異をみせるであろうということである。どこに出稼ぎに行くかという目的地の決定にお

いては、本稿の分析からもわかるように、それぞれの出稼ぎ先における賃金や労働条件の格差よりも、むしろどこに援助を要求することができる親族・姻族などがいるかが重要となる。しかし、様々な出稼ぎ先社会は法的経済的条件を異にしており、出稼ぎの展開過程も一様ではないだろう。従ってある程度の広域調査による比較は、本稿で行ったような送り出し地域社会からの社会・文化的適応の議論をより深めるものと思われる。

二つ目は、海外出稼ぎの急速な広がりに伴う母村落社会での広範な社会変化や適応の問題である。一例を挙げれば、近年のイロコス地方においては、洗礼式や結婚式の後などに執り行われるパダヤ（*padaya*）と呼ばれる宴が以前より盛大に行われるようになってきている。これは、多くの場合出稼ぎに出た人々が母村落社会における様々な宴に投資していくことから生じる。このような現象はカーニーがメキシコのMixtecのアメリカ合衆国への国際労働力移動によって引き起こされる社会・文化変化に関して記述した現象と類似しているということができる［Kearny 1986b:88-90］。出稼ぎに出たMixtecの人々は出稼ぎ先から、母村落社会のフィエスタや、婚資、結婚式後の儀礼などに多大な出費を行う。出稼ぎ労働者達は米墨国境地帯のメスティーソ文化に同化吸収されていくのではなく、母村落社会とのつながりを様々な行為によって強化させる方向へ動いているのである。こうした現象は、「mixtecのエスニシティが、接合ネットワーク[19]として概念化される拡大したコミュニティの中で持続し、そして活性化されている」［ibid.:90］ことを示している。本稿の調査対象となったS村においても、母村と出稼ぎ先とをつなぐネットワークが親族・姻族間の援助や里子取りの実践などを通じて強く維持されている様子が見られたが、こうした海外出稼ぎの展開に伴うネットワークの拡大が、イロカノ社会にとってどのような意味を持っているのかを母村落社会の宴の活性化に着目して論じることは、本稿の基本的な立場からみて非常に興味深い問題となろう。

〈付記〉本稿の基礎となった現地調査中は、イロコス・ノルテ州P町S村の方々、P町役場の方々、フィリピン大学アジアセンターのC・ソブリチア先生、マリアノ・マルコス・ステート大学のA・ピンゴール先生、及びP町のE・ピンゴール氏に大変お世話になりました。また、本稿を執筆するにあたり、神戸大学の合田濤先生と筑波大学のL・バウゾン先生、前川啓治先生から貴重なコメントを戴きました。記してここに感謝します。しかし論文のすべての責任は筆者にある。

[註]

（1）イロカノはフィリピンのマジョリティ・グループである低地キリスト教徒民の中の一言語集団である。古くから移住を繰り返してきたため、イロカノの居住地はフィリピン全土に広がっている。また今世紀初頭からの移住先であったハワイ、アメリカ西海岸には多くのイロカノ・コミュニティを形成している。一九八七年の統計によると、フィリピン国内において日常イロカノ語を使用している世帯は約八八万世帯であり、そのうちイロコス地方に居住するのは約四一万世帯である［Philippine Statistical Year Book 1987:165］。

（2）本稿で用いる資料は、ロータリー財団の奨学生としてフィリピン大学留学中に一九九二年一二月から翌年五月まで断続的に約四ヶ月間、イロコス・ノルテ州において行った筆者の社会人類学的調査に基づいている。

（3）より具体的には、なぜ「急速な経済発展に成功しているように見える韓国も、経済停滞に悩むフィリピン、パキスタンと同じく代表的な労働力輸出国となっている」［成家　一九九一：四一］のかといった点、あるいはこの理論では両地域間の経済格差の変動は、時間差はあるもののそのまま労働力移動の規模に影響を与えるとされるにも拘らず、なぜ「実際には一旦移住の流れが作られると、その流れは経済格差の変動にあまり影響されず続いていく」［Portes & Böröcz 1989:612］のかといった点などである。

（4）このような歴史―構造アプローチの（人類学の立場からみた）問題点は、このアプローチが影響を受けている世界システム論とも共通するものである。辺境地域の社会経済状況を世界資本主義経済の展開の結実として位置づける世界システム論においては、資本主義が浸透する以前の社会の多様性や資本主義の浸透の仕方、浸透への対応の差異は考慮されず、辺境地域は一括され受動的なものとして描かれざるをえない［Wolf 1982: 23; Nash 1981:398-400］。

（5）Philippine Statistical Year Book 1992:1-4

（6）S村からの主要な移住先であるイタリアについて付言しておけば、イタリアはEC諸国のうちでもEC域外からの外国人労働者がもっとも多く、一九九一年一二月三一日時点でのフィリピン人への滞在許可証交付数は四万人以上となっている［関口　一九九四：一六三―七］。不法を含めた実際のフィリピン人労働者はその数字を大きく上回るものと思われる。

（7）イタリア政府は一九九〇年のマルテッリ法が制定されるまでは外国人労働者の受け入れに関しては放任主義をとっていた［関口　一九九四：一七一］。ヨーロッパ諸国は一九七三年のオイルショック以降、移住者の入国を制限する政策をとるようになったが、イタリア政府が入移民（immigration）政策に本腰を入れ始めたのは一九八〇年代後半であった。しかしこうした政策転換にも拘らずイタリアへの不法移民は現在でもかなり見られる。イタリアを含むヨーロッパ諸国の移民政策の転換についてはCollinson［1993:46-63］を参照。

（8）出稼ぎ労働者及びその家族へのインタビューでは、S村の人々が利用する特定の代理店（普通マニラにある）はなかった。「代理店はどこでも大体一緒だったからマニラにいる兄の家の近くにあったところに頼んだよ。でもキョウダイとは別のとこ

ろだった。」

(9) これらの状況の他にも、移住先においてS村からの出稼ぎ労働者達によって社会関係が組織される状況がいくつか挙げられる。例えば、新入者や一時帰国者のための集い、ケースとしては少ないが移住先で子供が生まれた場合のカトリックの洗礼式及びその後の宴(*padaya*)、また日曜日毎に特定の公園にイロコス地方だけではなく、他の地域からのフィリピン人とともに休日を過ごすこと、などがインタビュー中に語られた。

(10) 借金をした場合の返済の義務や利子の有無も、はっきりとしたデータは得られなかったが、親族関係の遠近によって違いが出てくる傾向がある。例えば、夫婦間、親子(未婚)間では返済の義務はなく、キョウダイ間や親子(既婚)間では利子がつかない、などである。もちろん、これは人々が語る傾向であり、実際には援助関係を結ぶ二者間の個人的なつきあいを含めた〈距離〉に左右される。

(11) この資金援助関係の資料は、アナの父親へのインタビューによっている。それゆえ、金額に関してはおそらく正確ではないことをお断りしておきたい。ちなみに、一九八〇年当時にローマへ出稼ぎに出る場合、大体一万五千~二万五千ペソ程度が必要であったことが他の出稼ぎ労働者へのインタビューから推定される。

(12) アナの父はS村の村長を長く務めており、アナの家族はS村の中心的な家族となっている。そのためか、アナや彼女の兄のパトリックは多くの出稼ぎ希望者を広く援助している。

(13) 山下はインドネシア・トラジャの都市移住に関して以下のように述べる。「ホームランド・村落の社会と移住地・都市の社会はあきらかに一つの時代を共有しており、都市の社会が『近代的』というならその分だけ村落の社会もそうなのであって、都市対村落の対立を通常行われるように近代対伝統の対立あるいは二つの異なったタイプの社会として捉えるわけにはゆかないのである。」[山下 一九八八:一六六] 国際労働力移動の研究においても同様のことがいえるであろう。

(14) ネルソンはこのような里子概念を用いてケニアにおける農村―都市移住の展開に見られる里子の様態と、その機能についての興味深い事例を提供している [Nelson 1987]。

(15) 但し、*tarakem* の場合でも里親との関係によって(例えば生まれてからずっと里子となっており里親がその子に愛着を実子と同じように持っている場合等)、他の子供たちとの調整がつけば、里親の財産の一部を相続することも稀ではあるがあるという [Bauzon 1994]。

(16) 歴史的に土地が希少資源であったイロコス地方では、両親が健在なうちには与えるべき耕地がほとんどないので、末子(男子)へ多くの土地を老後の扶養と引き替えに *sab-ong* として与える傾向があるというが [Lewis 1971:92]、実際にどの息子に多くの土地を持参財として与えるかは、経済的条件などの個別の条件による。

(17) 具体的には、耕地を相続した者が他のキョウダイへ均分した耕地の相当額を支払う、また、相続者が他のキョウダイへ毎年一定の収穫(通常の小作の取り分の50%を相続者がまず取り、残った分をすべてのキョウダイで均等に分割するなど)を渡すなどの調整を指す [cf.Lewis 1971:88]。

(18) 尚、イロカノ社会における世帯構成は著しく流動的であるた

め、ここに挙げる事例もあくまで筆者が世帯調査を行った時点（一九九三年四月）のものである。

(19) カーニーは母村といくつかの出稼ぎ先とを結び付けるネットワークを「接合移民ネットワーク」[Kearny 1986a:353-5]と呼んでいる。

参考文献

Bautista, Cynthia R. B. 1988 "Economic Impact on Workers and Their Family." in *Migration Studies*. Quezon City, Department of Sociology, University of the Philippines.

Bauzon, Leslie E. 1994 Personal Communication.

Blanc-Szanton, Cristina 1990 "Collision of Cultures : Historical Reformulations of Gender in the Lowland Visayas, Philippines." in Atkinson, Jane M. and Shelly Errington eds. *Power and Difference: Gender in Island Southeast Asia*. Stanford, Stanford University Press, pp.*345-384*.

Cariño, Benjamin V. 1992 "Migrant Wokers from the Philippines" in Battistella, Granziano and Anthony Paganoni eds. *Philippine Labor Migration: Impact and Policy*. Quezon City, Scalabrini Migration Center, pp.4-21.

Collinson, Sarah 1993 *Europe and International Migration*. London, Pinter Publishers.

Glick Schiller, Nina, L. Basch and C. Blanc-Szanton 1992 "Transnationalism: A New Framework for Understanding Migration." in Glick Shciller, N., L. Bach and C. Blanc-Szanton eds. *Towards a Transnational Perspective on Migration,* New York, The New York Academy of Science, pp.1-24.

合田濤 一九八九『首狩りと言霊―フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観―』弘文堂

Griffith, Stephen 1978 "Emigrants and Entrepreneurs: Social and Economic Strategies in a Philippine Peasant Community." Ph.D. Dissertation, Honolulu, University of Hawaii.

石川登 一九九三「農民と往復切符：循環的労働移動とコミュニティ研究の前線」『民族学研究』五八（二）：五三―七二頁

Jocano, F. Landa 1982 *The Ilocanos*. Quezon City, Asian Center, University of the Philippines.

Kearney, Michael 1986a "From the Invisible Hand to Visible Feet: Anthropological Studies of Migration and Development." *Annual Review of Anthropology* 15:331-61.

――― 1986b "Integration of the Mixteca and the Western U.S.-Mexico Region Via Migratory Wage Labor." in Rosenthal-Urey, I. ed. *Regional Impacts of U.S.-Mexico Relations*. La Jalla, Center of U.S.-Mexico Relations, University of California, San Diego, pp.71-101.

菊池京子 一九九一「フィリピンからの国際労働力移動」『社会科学討究』一〇六：六六一―六八三頁

Lewis, Henry T. 1971 *Ilocano Rice Farmers*. Honolulu, University of Hawaii Press.

Liu, John M., P. M. Ong and C. Rosenstein 1991 "Dual Chain Migration: Post-1965 Filipino Immigration to the United

States." *International Migration Review* 25(3): 487-513.

Maegawa, Keiji 1994 "An Anthropological Perspective on Social Change in the Modern World-System." 『歴史人類』 22:49-83.

村武精一　一九七三『家族の社会人類学』弘文堂

中根千枝　一九八七『社会人類学』東京大学出版会

成家克徳　一九九一「現代国際労働力移動の条件：経済の国際化と民族集団に着目して」『社会学評論』四一（四）：四八―六一頁

Nash, June 1981 "Ethnographic Aspect of the World Capitalist System." *Annual Review of Anthropology* 10 : 393-423.

Nelson, Nici 1989 "Rural-urban Child Fostering in Kenya: Migration, Kinship Ideology, and Class." in Eades, J. ed. *Migrants, Workers, and the Social Order*. London, Tavistock Publications. pp.181-198.

Nydegger, W. and Nydegger C. 1966 *Tarong: An Ilocos Barrio in the Philippines*. New York, John Wiley & Sons.

Ortner, Sherry B. 1984 "Theory in Anthropology since the Sixties." *Comparative Studies of Society and History* 26:126-166.

Pertierra, Raul 1988 *Religion, Politics, and Rationality in a Philippine Community*. Quezon City, Ateneo de Manila University Press.

———ed. 1992 *Remittances and Returnees: The Cultural Economy of Migration in Ilocos*. Quezon City, New Day Publishers.

Pingol, Alicia 1992 "Attractive and Imperative of Migration." in R. Pertierra ed. pp.78-117.

Portes, Alejandoro and Robert Bach 1985 *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*. Berkeley, University of California Press.

Portes, Alejandoro and J. Bõrõcz 1989 "Contemporary Immigration: Theoretical Perspective on Its Determinants and Mode of Incorporation." *International Migration Review* 23(3) : 606-630.

Sassen, Saskia 1988 *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow*. Cambridge, Cambridge University Press.

Schildkrout, Enid. 1973 "The Fostering of Children in Urban Ghana." *Urban Anthropology* 2: 48-73.

関口英子　一九九四「解説」マリオ・フォルトゥナート他著『イタリアの外国人労働者』明石書店　一五五―一六三頁

玉置康明　一九八二「フィリピン低地社会研究序説」『民族学研究』四七（三）：二六五―二九六頁

Young, James 1980 "Migration and Education in the Philippines: An Anthropological Study of an Ilocano Community." Ph.D. Dissertation, Stanford, California, Stanford University.

山下晋司　一九八八「部族・都市・国家：民族誌的研究の現在」伊藤亜人・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』ミネルヴァ書房　一四三―一七三頁

Wolf, Eric 1982 *Europe and the People without History*. Berkeley, University of California Press.

Wood, Charles H. 1982 "Equibrium and Historical-Structural Perspective on Migration." *International Migration Review* 16(2): 298-319.